

〈研究ノート〉

4年生時の教員免許状取得の有無および
教員採用試験受験の有無と1年生時の意識

石本雄真・柿内真紀・大谷直史

The Relationship Between Obtaining a Teaching License,
Taking Teacher Employment Examinations in the Fourth-Year,
and First-Year Perceptions

ISHIMOTO Yuma, KAKIUCHI Maki, OOTANI Tadasu

キーワード：教職課程，教員，教職，教員採用試験，教員免許状

Key Words: Teacher Training Course, Teacher, Teaching Profession, Teaching License, Teacher Employment Examinations

教員の勤務が非常に過酷であることが注目され、実際に精神疾患による休職者も過去最多となる中、2023年度に採用された公立学校教員の採用倍率が過去最低であったことが示されている。このような中公立学校教員の待遇を改善することは必須であるが、教員という仕事（教職）を進路として選択する学生を増やすことも喫緊の課題となっている。鳥取大学教員養成センターでは毎年教員免許取得をめざす学生へのアンケート調査を行っている。本研究はそのアンケート調査の結果をもとに、2020年度入学生の4年生時の進路選択が1年生時の意識とどのように関連するのかを検討し、教員免許状の取得を目指す学生がどのように進路意識を形成していくのかについて明らかにすることを目的とした。その結果、1年生時の教職に対する進路意識が4年生時の教員免許取得や教員採用試験受験の有無と大きく関連することが示された。

I. 問題・目的

2022年度（2023年度採用）、公立教員採用における採用倍率が過去最低となったことが明らかになった。特に小学校においては過去最低の2.3倍という倍率であった（文部科学省，2023a）。このことは、人手不足に伴う民間企業の旺盛な採用状況の影響も指摘されるが、あわせて、教員の働き方が非常に過酷であることがながらく注目されていることの影響も大きいと考えられる。実際に公立学校教員は時間外労働が非常に多く、精神疾患による休職者も2022年度に過去最多を更新している（文部科学省，2023b）。これに対し公立学校教員の待遇改善が必須であることは明白であるが、そのことを前提としたうえで教員という進路に関心をもつ学生を増やすことも喫緊の課題となっている。

このような状況において、教員免許状の取得を目指す学生がどのように進路意識を形成して

いくのかについて明らかにすることは、教員という進路に関心をもつ学生を増やす方策を検討する上で有用であると考えられる。教員免許状の取得が大学卒業の必須条件ではない場合、大学入学時点では教員免許状の取得を目指していたものの取得をやめることも多くみられる。また教員免許状を取得したとしても教員採用試験を受験しない者も多い。1年生時点で教員を目指していない学生でも教職課程の授業を受けたり、教育実習に参加したりする中で教員を目指すこともあると考えられる。逆に、1年生時点で教員を目指していても、教員を目指すことをやめる学生もいるであろう。本研究ではこのような4年生時の進路選択が1年生時の意識とどのように関連するのかを明らかにすることで、教員免許状の取得を目指す学生の進路意識の形成過程を探ることを目的とする。

2. 方法

i. 調査手続き

調査対象者 鳥取大学では教員免許状取得希望者を登録制としており、登録者は本学で教職ポートフォリオと呼ぶ履修カルテを作成することとなる。鳥取大学教員養成センターでは登録者に対して教職ポートフォリオ作成に関する支援や相談対応を行っており、そうした支援の一環という目的および教職課程の点検、評価といった目的で登録者に対して、毎年アンケート調査を実施している。加えて、大学からの教員免許状申請に関する4年生時の説明会において進路アンケートを実施している。本研究では、これらの調査で得られたデータのうち、2020年度入学生が1年生時に回答したアンケートおよび4年生時に回答した進路アンケートのデータを用いる。対象者には地域学部、農学部、工学部の学生が含まれる。なお、いずれの学部においても鳥取大学では教員免許状の取得は卒業の要件とはなっていない。

調査時期 1年生時のアンケートは2020年10月、4年生時のアンケートは2023年10月に実施した。

調査方法 1年生に対しては、教職に関わる必修授業の際に回答を依頼し、各自オンラインフォームにて回答した。4年生に対しては、教員免許状申請に関する説明会の際に紙のアンケートへの回答を求めた。

倫理的配慮 アンケートに対しては、調査結果を教職課程における指導にも用いることから全員に回答を求めているが、研究への利用を望まない者はその旨記載することで研究目的での利用を拒否できることを文面に記載し説明した。

ii. 調査用紙の構成

(1)1年生時のアンケート

教職に対する現在の考え 大学卒業後の進路における教職の位置づけを、「教員が就職先の第一希望である」、「教員は就職先の候補の1つである」、「卒業後すぐに教員になることは考えていないが、将来的に教員に転職することは候補としてある」、「教員は就職先の候補として考えていない（教員になるつもりはない）」、「就職先について具体的な考えはない」の5つの選択肢から選択するように求めた。

教員を目指すことに対する迷い 現在の、教員を目指すことに対する迷いの程度を「まったく迷いはない（1点）」から「迷いがある（4点）」までの4件法で回答を求めた。

教師や学校についての考え 教師や学校の仕事内容や役割に対する考えについて調査を行った。19項目に対して「まったくそう思わない（1点）」から「とてもそう思う（4点）」までの4件

法で回答を求めた (Table3)。

教師観 調査対象者が教師をどのように捉えているのかについて調査を行った。14項目に対して「まったくそう思わない (1点)」から「とてもそう思う (4点)」までの4件法で回答を求めた (Table4)。

教師効力感尺度 春原 (2007) の「教育学部生用教師効力感尺度」を用いた (26項目)。「学級管理・運営効力感」, 「教授・指導効力感」, 「子ども理解・関係形成効力感」の3つの下位尺度が含まれる。それぞれどの程度あてはまるかを、「あてはまらない (1点)」から「あてはまる (5点)」までの5件法で回答を求めた。

教師能力達成感 鳥取大学として教員を目指す学生に求める能力5つについてそれぞれ4項目で測定する尺度を実施した (20項目)。それぞれどの程度あてはまるかを、「あてはまらない (1点)」から「あてはまる (5点)」までの5件法で回答を求めた。

(2) 4年生時のアンケート

公立学校教員採用試験受験の有無, 私立学校教員採用試験受験の有無, 保育士採用試験受験の有無について尋ねた。なお, 教員採用試験には幼稚園教諭の採用試験も含んでいる。

それぞれのアンケートでは, これらのほかにも同時にいくつかの内容について調査を行っているが, 本研究で用いる内容は以上のものである。

iii. 分析方法

4年生時点でのアンケートに回答した者を教員免許状取得者とした。実際には教員免許状を取得するもののアンケートに回答していない者や, アンケートに回答したものの単位取得状況等の事情で教員免許状を取得しない者も少数いるが, 例年これらを合わせても数名であるためこのように扱うこととした。

教師効力感尺度では, 下位尺度ごとに合計得点を項目数で割ったものを下位尺度得点とした。教師能力達成感では, 下位尺度ごとの単純合計を下位尺度得点とした。教師や学校についての考え, 教師感は項目ごとに分析を行った。

3. 結果

i. 分析対象者の概要

1年生時点でのアンケート回答者は128名, 4年生時点でのアンケート回答者は66名であった。4年生時点でのアンケート回答者のうち7名は1年生時点でのアンケートに回答していなかったため, 分析から除外した。

4年生時のアンケート回答者のうち7名を除いた59名を教員免許状取得者とした。そのほかの69名を, 教員免許状を取得しなかった者 (不取得者) とした。教員免許状取得者のうち, 教員採用試験 (公立, 私立, 保育士採用試験含む) を受験した者は25名であった。なお, 保

Table1 1年生時の教職に対する考えと4年生時の進路状況

		第一希望		候補の1つ		将来的に		候補でない		未定	
		n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
教採受験	受験	19	76.0	5	20.0	1	4.0	0	.0	0	.0
	受験なし	7	20.6	18	52.9	4	11.8	3	8.8	2	5.9
	免許不取得	14	20.3	28	40.6	22	31.9	5	7.2	0	.0
合計		40	31.3	51	39.8	27	21.1	8	6.3	2	1.6

Table2 4年生時の進路状況による1年生時の迷いの程度

	A:受験			B:受験なし			C:免許不取得							
	m	SD	p	m	SD	p	m	SD	p					
迷いの程度	2.1	.8	2.7	.9	2.6	1.0	3.832	.024	-0.731	.053	-0.588	.035	.053	1.000

Table3 4年生時の進路状況による教師や学校についての考え

	A:受験			B:受験なし			C:免許不取得							
	m	SD	p	m	SD	p	m	SD	p					
教師は、熱意と愛情があれば務まる(勤まる)職業である	2.3	.6	2.3	.6	2.2	.8	.338	.714	.096	1.000	.170	1.000	.093	1.000
教師は、「専門的知識」よりも「優れた人間性」を必要とする職業である	3.2	.6	2.9	.6	2.9	.7	1.089	.340	.345	.639	.329	.485	.000	1.000
教師は、私生活でも模範的であるべきだ	3.1	.8	3.0	.8	2.8	.9	1.199	.305	.146	1.000	.326	.451	.194	1.000
教師は、学校外での子どもへの生活にも配慮をするべきである	3.4	.7	3.1	.6	2.9	.9	3.903	.023	.477	.374	.608	.019	.235	.762
教師の仕事量は、勤務時間内に収まるものである	1.8	.8	1.6	.7	1.5	.7	1.336	.267	.271	.909	.366	.314	.112	1.000
教師は、尊敬される職業である	3.2	.7	3.2	.6	2.9	.8	3.104	.048	-.015	1.000	.416	.190	.443	.107
教師は、やりがいのある職業である	3.5	.7	3.5	.5	3.4	.6	.742	.478	.033	1.000	.217	.956	.205	1.000
教師の体置は、場合によっては必要である	1.5	.8	1.5	.7	1.5	.8	.029	.971	-.028	1.000	-.050	1.000	-.026	1.000
子どもの教育に関しては、教師と親は対等な立場にあるべきだ	2.8	.7	2.9	.9	2.9	.9	.471	.626	-.232	1.000	-.215	1.000	.000	1.000
教師は、学ぶことのおもしろさに子どもを導く職業である	3.6	.5	3.5	.6	3.5	.7	.066	.936	.052	1.000	.078	1.000	.030	1.000
教員給与は、成果に応じて査定して決定する方法がよい	2.4	.8	2.5	.7	2.4	.9	.217	.805	-.192	1.000	-.069	1.000	.097	1.000
家庭や地域社会は、今よりも学校運営に関わるほうがよい	3.0	.6	3.0	.6	2.8	.8	1.296	.277	.000	1.000	.268	.671	.276	.527
学校において、教員以外の人材も積極的に採用し活用すべきだ	3.1	.8	3.2	.6	3.1	.8	.626	.536	-.237	1.000	.013	1.000	.240	.845
教師は、民間企業で働くよりも楽な仕事である	1.7	.5	1.3	.5	1.4	.5	3.928	.022	.757	.024	.527	.063	-.177	1.000
子どもの心の健康を維持、向上させることも教師の仕事である	3.7	.6	3.6	.5	3.5	.6	1.598	.206	.115	1.000	.359	.346	.271	.633
子どもの社会性やコミュニケーション能力を高めることも教師の仕事である	3.6	.6	3.6	.5	3.5	.6	.808	.448	.019	1.000	.233	.937	.226	.912
教育のためには、校則で髪型や服装を指定することも必要である	2.5	.9	2.7	.7	2.3	.8	3.528	.032	-.202	1.000	.323	.463	.571	.035
学校は家庭環境が恵まれない子に対して、家庭の機能を補うことができる	2.5	.7	2.7	.7	2.7	.8	.740	.479	-.332	.769	-.245	.868	.053	1.000
子どもたちの教育のためには、教師が長時間労働になるもやむを得ない	2.6	.9	2.5	.7	2.4	.9	.816	.445	.088	1.000	.256	.759	.182	1.000

Table4 4年生時の進路状況による教師観

	A:受験			B:受験なし			C:免許不取得							
	25			34			69							
	m	SD	p	m	SD	p	m	SD	p					
自分なりの信念を持って、教育活動に臨んでいる	3.2	.6	2.9	.5	2.8	.7	3.585	.031	.548	.286	.580	.025	.171	1.000
研究熱心である	3.2	.5	2.8	.6	2.8	.8	3.675	.028	.757	.053	.565	.039	-.054	1.000
児童・生徒に対して細やかな気配りをしている	2.9	.6	2.9	.6	2.7	.8	.818	.444	-.049	1.000	.190	1.000	.233	.741
社会経験が豊かである	3.1	.7	2.9	.7	2.8	.9	1.755	.177	.379	.686	.420	.190	.116	1.000
幅広い知識を持っている	3.4	.6	3.3	.5	3.1	.8	2.303	.104	.129	1.000	.400	.200	.327	.344
学級運営にあたりリーダーシップを発揮している	2.9	.6	2.7	.8	2.7	.7	1.023	.362	.335	.616	.310	.564	-.027	1.000
愛情豊かな人が多い	3.0	.7	2.9	.7	2.8	.8	1.078	.343	.173	1.000	.324	.486	.171	1.000
人間的に優れた人が多い	3.0	.7	2.8	.6	2.6	.8	2.047	.133	.216	1.000	.422	.178	.244	.672
保護者からの信頼を十分に得ている	2.8	.6	2.6	.7	2.5	.7	1.266	.286	.291	.796	.380	.345	.071	1.000
教材研究(授業準備)をする時間が十分にある	2.2	.7	2.3	.8	2.3	.7	.084	.919	-.026	1.000	-.088	1.000	-.054	1.000
教師同士で十分に連携している	3.0	.7	2.8	.7	2.7	.8	2.148	.121	.422	.437	.463	.123	.083	1.000
教師以外の職業の人と十分に連携している	2.8	.7	2.3	.8	2.3	.7	3.991	.021	.637	.039	.643	.030	-.053	1.000
児童・生徒の学業以外の面も十分にサポートしている	3.0	.7	3.0	.7	2.7	.7	2.208	.114	.100	1.000	.423	.217	.320	.369
生き生きと仕事をしている	2.8	.6	2.9	.7	2.6	.8	1.408	.248	-.077	1.000	.254	.858	.313	.370

1 99 1

Table5 4年生時の進路状況による教師効力感

	A:受験			B:受験なし			C:免許不取得							
	25			34			69							
	m	SD	p	m	SD	p	m	SD	p					
学級管理・運営効力感	2.9	.7	2.9	.6	2.9	.6	.142	.868	-.052	1.000	.055	1.000	.115	1.000
教授・指導効力感	2.9	.6	3.1	.5	3.1	.5	1.453	.238	-.440	.285	-.294	.584	.144	1.000
子ども理解・関係形成効力感	3.3	.7	3.4	.6	3.2	.7	.959	.386	-.208	1.000	.089	1.000	.292	.506

Table6 4年生時の進路状況による教師能力達成感

	A:受験			B:受験なし			C:免許不取得					
	25		34		69		A-B		A-C		B-C	
	m	SD	m	SD	m	SD	g	p	g	p	g	p
学習指導と生徒指導	11.7	3.0	13.2	2.2	12.5	3.2	1.762	.176	-0.564	.190	-0.248	.765
生涯発達	11.4	2.7	13.1	2.5	12.8	2.9	3.012	.053	-0.666	.062	-0.468	.119
特性への対応	13.5	2.9	14.5	2.2	13.7	2.7	1.429	.243	-0.398	.448	-0.063	1.000
興味関心、継続性	15.2	2.2	13.7	2.5	13.5	3.0	3.447	.035	.620	.127	.587	.033
連携	12.9	2.5	13.0	2.5	12.5	2.9	.524	.593	-0.032	1.000	.159	1.000

育士採用試験は教員採用試験とは異なるが、本研究では分析の趣旨を鑑み含んで分析をしている。保育士採用試験の受験者は2名であった。

ii. 教職に対する現在の考え

教員免許を取得し教員採用試験を受験した者（受験群）は1年生時点で76.0%の者が、教員が第一希望であるとしていた。一方で、教員免許を取得したものの教員採用試験を受験しなかった者（受験なし群）では20.6%、教員免許を取得しなかった者（免許不取得群）では20.3%であり、最終的に教員採用試験を受験する者では1年生時点で教員を第一希望として考えている者が多いことが示された（Table1）。

iii. 教員を目指すことに対する迷い

受験群、受験なし群、免許不取得群の3群で1年生時の迷いの程度の差について比較したところ有意な差がみられ、多重比較の結果免許不取得群が受験群よりも有意に得点が高いことが示された（Table2）。統計的に有意な差ではないものの、受験なし群も免許不取得群と同程度の迷いを1年生時に示しており、受験群よりも高い得点となっている。

iv. 教師や学校についての考え

受験群、受験なし群、免許不取得群の3群でそれぞれの項目の得点を比較したところ、ほとんど有意な差はみられなかった（Table3）。「教師は、学校外での子どもの生活にも配慮をするべきである」、「教師は、尊敬される職業である」、「教師は、民間企業で働くよりも楽な仕事である」、「教育のためには、校則で髪型や服装を指定することも必要である」の4項目においては有意な差が示された。多重比較の結果、「教師は、学校外での子どもの生活にも配慮をするべきである」については受験群が免許不取得群より高く、「教師は、尊敬される職業である」については、有意な差が示されなかった。「教師は、民間企業で働くよりも楽な仕事である」については受験群が受験なし群よりも高く、「教育のためには、校則で髪型や服装を指定することも必要である」については、受験なし群が免許不取得群よりも高かった。

v. 教師観

受験群、受験なし群、免許不取得群の3群でそれぞれの項目の得点を比較したところ、ほとんど有意な差はみられなかった（Table4）。「自分なりの信念を持って、教育活動に臨んでいる」、「研究熱心である」、「教師以外の職業の人と十分に連携している」の3項目においては有意な差が示された。多重比較の結果「自分なりの信念を持って、教育活動に臨んでいる」および「研究熱心である」については受験群が免許不取得群より高く、「教師以外の職業の人と十分に連携している」については、受験群が受験なし群や免許不取得群よりも高かった。

vi. 教師効力感

受験群, 受験なし群, 免許不取得群の3群でそれぞれの下位尺度の得点を比較したところ, いずれの下位尺度においても有意な得点の差は示されなかった (Table5)。

vii. 教師能力達成感

受験群, 受験なし群, 免許不取得群の3群でそれぞれの能力の得点を比較したところ, 「興味関心, 継続性」においてのみ有意な得点の差が示され, 多重比較の結果受験群が免許不取得群よりも得点が高いことが示された (Table6)。

4. 考察

i. 教職に対する現在の考えおよび教員を目指すことに対する迷い

教員免許を取得し教員採用試験を受験した者は1年生時点で教員になるという希望を明確に持っている者が多いことが示された。また, 教員免許を取得し教員採用試験を受験した者は1年生時点で教員を目指すことに対する迷いが少ないことが示された。1年生のアンケート回答後, 3年間の教職課程において教職という進路に関心をもったり関心を失ったりすることも予想されたが, 実際には多くの者は1年生時点で進路意識を明確にもっており, 迷いも少ないことがわかった。一方で割合としては多くないが, 1年生時点で教員を第一希望としていたものの教員免許を取得しなかった者や教員採用試験を受験しなかった者もあり, これらの者がどのような理由で教職という進路を選ばないことにしたのかについては, 今後明らかにする意味があると思われる。

ii. 教師や学校についての考えおよび教師観

これらの項目の比較により, 受験群は比較的教職に対してポジティブな印象をもっていたことが示された。1年生時点のアンケートへ回答して以降, 多くの教職課程の授業を受け教育実習にも参加しているものの, このような意識の差が4年生の進路選択の違いによって示されているということは, 1年生時点でもっている教職や教員に対する意識をその後の教職課程においてあまり変化させることができているとも考えられる。もしくは, 確証バイアスの影響により, ポジティブな印象をもつ者はその後の教職課程においてもポジティブな情報を受け取りその印象を強化する一方で, ネガティブな印象をもつ者もネガティブな印象を強化している可能性もある。この場合, ポジティブな印象をもって教職に就いた者が現実との違いにより就職後に心理的不適応を示すことも考えられるため, 適切な情報提供を強めることも必要かもしれない。また, 「教師は, 民間企業で働くよりも楽な仕事である」について, 受験群が受験なし群よりも高かった結果は2020年以降いわゆる教職はブラックであるという言説がメディア等でも盛んに取りあげられた時期にあたりと考えられるだけに興味深い。ブラックであっても民間企業よりも楽な仕事であると受験群が捉えているのはなぜなのかという問いが残る。

iii. 教師効力感

教師効力感については3群間で差がないことが示された。まだほとんど教職課程の授業を受けていない1年生時点の教職に関わる能力の自己評価であるため, 差が示されなかったと考えられる。

iv. 教師能力達成感

3群間で有意な差がみられた「興味関心, 継続性」については, 「自分が教員免許取得を目指す校種や教科以外の教育にも関心がある」, 「授業時間外にも自ら教職に関する学習を行って

いる」、「教員になった後も継続的に学習を続けていきたいと思う」、「教職との関連を意識しながら、課外活動（部活、サークル、バイトなど）や日常生活でのさまざまな活動に取り組んでいる」の4項目から構成されるものであり、興味関心の高さや意欲の高さを示しているといえる。教員免許を取得し教員採用試験を受験した者は1年生時点から、受験しなかった者や教員免許を取得しなかった者と比較し興味関心や意欲が高いことが明らかになった。このことは、1年生時点で興味関心や意欲の低い者の興味関心や意欲をその後の教職課程で十分に引き出し、免許取得や教員採用試験時の受験につなげることができていないともいえ、教職課程の内容について見直す必要性も考えられる。

v. 総合考察

本研究では4年生時点での教員免許状取得の有無や教員採用試験受験の有無によって、1年生時点での教職に関わる意識が異なるのかについて検討することを通して、教員免許状の取得を目指す学生の進路意識の形成過程を探ることを目的とした。その結果として、事前の予想に反し1年生時点の教職に対する進路意識と4年生時点での進路が大きく関連していることが示された。一方で、進路意識とは異なる教職や教員に対する意識についてはほとんど差が見られないことも示された。大学生年齢は青年期に該当しアイデンティティ形成の途上であるうえ、実際に進路選択を迫られる時期でもある。このような段階において大学の授業や周囲の意見などによって進路を決定していくと考えられるものの、本研究の結果からは1年生時点での意識が大きく影響しており、その後のおよそ3年間の中ではあまり意識が変化しないことが窺われた。このことは、教員採用試験を受験する者は早くに意志を固めていると評価することもできるが、一方で教職課程において十分に情報を提供できていないおそれもある。教職に対してポジティブな印象をもつこと自体は重要であるが、まだ教職課程の授業をほとんど受けていない段階の印象は、十分な情報を踏まえたものではない可能性があり、実際に教職に就いた後に現実とのギャップを感じることも考えられる。今後は、教職課程の中で具体的な教職に関する情報を十分に提供し、それらの情報を踏まえて元からもつ印象を再構成してもらうようにすることも必要であろう。

本研究は1つの学年コホートのみを対象としたものであり、4年生10月時点でのアンケートへの回答をもって教員免許状の取得とみなしているなど、精度の高い調査とはいえない。また、特定の一大学における分析であり一般化できるかどうかは明確ではない。また、今回分析の対象とした2020年度入学生はCovid-19の感染拡大により、入学時よりオンライン授業が多く、サークルへの参加や活動も少なく、移動の自粛など授業以外でも対面での交流が最も制限されるなかで4年間の大学生活を過ごした学生である。その影響の有無も今後、他の入学年度学生の分析結果と比較することにより明らかにされるだろう。

今後はより広い対象に調査を行い、教職という進路に対する意思決定の形成プロセスを明らかにすることが期待される。教員採用試験受験者の減少傾向が続く中、教職の待遇改善等の対応が必要であることは前提として論を待たないものの、教職という進路に対する意思決定の形成プロセスを明らかにすることができれば、教職に関心をもつ者を増やすための効果的な方策を立てることにもつながると考えられる。

引用文献

春原淑雄 (2007). 教育学部生の教師効力感に関する研究—尺度の作成と教育実習にともなう変化— 日本教師教育学会年報, 16, 98-108.

文部科学省. (2023a). 令和5年度(令和4年度実施)公立学校教員採用選考試験の実施状況について.

Retrieved February 15, 2024, from https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/1416039_00009.html

文部科学省. (2023b). 令和4年度公立学校教職員の人事行政状況調査について. Retrieved February 15,

2024, from https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinji/1411820_00007.htm